The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『正法眼蔵』「仏教」巻に見られる『法華経』並びに天台教学の受容
――特に九分教・十二分教の構成について――

清野宏道

はじめに

『正法眼蔵』「仏教」巻は、唐代に打ち立てられた「教外別伝不立文字、直指人心見性成仏」という主張を、単に「文字不要の自己観察による成仏」と誤謬した後世の禅者の理解を弁駁する説示と言える。道元禅師（一二〇〇―一二五三、以下禅師とも）は、巻中で「このゆえに、上乗一心といふは、三乗十二分教、これなり、大蔵・小蔵、これなり」[1]と述べて三乗十二分教こそが仏祖を仏祖たらしめる釈尊正伝の教法であると明言している。そこで注目すべきは、禅師が十二分教を『法華経』の説に依拠して説いている点である[2]。本論攷ではその点に注目し、禅師が天台教学と『法華経』をその証左としている所以を探りたい。

九分教と十二分教

知られるように、九分教・十二分教とは経典を説示形式や表現形式から九種、もしくは十二種に分類する体系のことである。その原初について定説は見ないが、その端緒は既にパーリ文献に見られるという。通例、上座部仏教は九部、大乗仏教は十二部の分類方法を用いるとされており、その性質から「九分教が成立した後に十二分教が形成された」というのは水野弘元氏や前田恵学氏、平川彰氏等が論じたところであって、現在ではこれがほぼ定説となっている。ただ、十二分教を主体とするはずの大乗経典にも九分教を用いているものはある。その代表として挙げられるのが『法華経』と『涅槃経』である。先の諸氏における論攷に従えば、『涅槃経』は小乗の象徴として九分教を示しているが、『法華経』は大乗に入る足掛かりとしてこれを説いているという。要するに両経の九分教の性格には異同があるのである。即ち、『法華経』では九分教を小乗法として排斥せずに、大乗会入の要因、更に言えば授記作仏の根幹として位置付けているのである。その点から『法華経』の九分教は十二分教成立の後に再構築され

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

た新たな九分教と言われている。

『法華玄義』に依拠した十二分教

「仏教」巻の十二分教が『法華玄義』のそれに依拠していることは先に触れたが、説示に「その三乗十二分教、そこばくあるなかの一隅をあぐるには、すなはちこれあり」[3]とあることから、禅師は『法華玄義』の十二分教を信頼し、全面的に享受していたと思われる。その記述は以下の通りである。

十二分教〈修多羅、亦云線経、此云法本、又云契経〉一者素呾纜　此云契経。二者祇夜　此云重頌。〈以偈頌修多羅也〉三者和伽羅那　此云授記。四者伽陀　此云諷誦。〈此云不重頌、如此間詩頌〉五者憂陀那　此云無問自説。〈無問自説経者、聖人説法、皆待請問、然為衆生、作不請之師、故無問自説、又仏法難知、名無能人問、若不自説、衆則不知為説不説、又復不知為説、何法故、無問自説、乃所以彰所説甚深（底本、深ヲ除ト誤写）唯証、是以寄無問自説、以彰所顕也〉六者尼陀那　此云因縁。〈因縁経（底本、経ナシ、諸本ニ依ル）者、欲明戒法、必因犯彰過、過相彰現、方得立制、此亦託因縁、以明所顕也〉七者波陀那　此云譬喩。〈阿波陀那〉八者伊帝目多伽　此云本事。〈此云如是語、亦云本事〉九者闍陀伽　此云本生。〈本生事者、謂説前生菩薩行事、本事事者、謂説前世諸相応事〉十者毘仏略　此云方広。十一者阿浮陀達磨　此云未曾有。十二者優婆提舎　此云論議。

『全集』一（三八七―三八八頁）

この十二分教の構成を用いる典籍は数多く存在するが、注目すべきは各項目の名称、及び標題・二・四・五・六・七・八・九項に記されている注釈である。この中、九に対する「本生事者…」という記述のみは『瑜伽師地論』からの引用[4]であるが、それ以外の典拠は『法華玄義』であると言える。ただ、この注釈の原文が一連の記述でないことに注意しなければならない。紙幅の都合上、原文の記載は省くが、典拠の文では五と六、及び標題・二・四・七・八が一連の文となっている。先ず、五・六の注釈文について言えば、これは迹門十妙―説法妙―釈法名の段に記されている達摩鬱多羅の七種の十二分教解釈[5]からの引用である。他方、標題・二・四・七・八の注釈文は、その後に記されている智顗（五三八―五九七）の十二分教解釈[6]からの引用である。こうしたところから、道元禅師は『法華玄義』に則って十二分教の各項目を理解していたことが推察されるのである。更に、「仏教」巻には十二分教の解釈として以下の文が続けて引用されている。

如来則為直説二陰界入等仮実之法一、是名二修多羅一。或四五六七八九言偈、重頌二世界陰入等事一、是名二祇夜一。或直記二衆生未来事一、乃至記二鴿雀成仏等一、是名二和伽羅那一。或孤起偈、記二世界陰入等事一、是名二伽陀一。或無二人問一、自説二世界事一、是名二優陀那一。或約二世界不善事一、而結二禁戒一、是名二尼陀那一。或以二譬喩一説二世界事一、是名二阿波陀那一。或説二本昔世界事一、是名二伊帝目多伽一。或説二本昔受生事一、是名二闍陀伽一。或説二世界広大事一、是名二毘仏略一。或説二世界未曾有事一、是名二阿浮陀達摩一。或問二難世界事一、是名二優婆提舎一。此是世界悉檀、為レ悦二衆生一故、起二十二部経一。

『全集』一（三八八頁）

この文も『法華玄義』からの引用[7]である。典拠は七番共解の第七会異で四悉壇に十重を立てる中の起教観の一部であるが、その点に注目すべきである。禅師が標題・二・四・七・

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

八の解釈に引用している智顗の十二分教解釈の文頭には「上起教中已レ説」[8]という記述がある。それを踏まえれば、禅師が『法華玄義』の十二分教の論説、及び構造を充分に熟知した上で引用を行っていることが推察される。

では、禅師が『法華玄義』に依拠した所以について考えてみたい。起教観では四悉壇と化法の四教、及び五時を対峙させ、蔵通別円の各々において四悉壇を以て十二分教の起こる様相を論じている。また、十重の弁相や起教観では仏の説法に可説・不可説の二種を立て、仏の教説の諸相を明かしており、十重の第六では説黙を立てて衆生を得道へと導く仏の説法に聖黙・聖説の二種があることを明示している。つまり、仏の説法には文言や言説を用いるものとそうでないものの二種があることを説いているのである。先の文は、起教観の中で「四悉壇を以て三蔵教の十二分教を起こす」段からの引用であるが、更に言えばその箇所は起教観における可説の初めであることが指摘でき、この点が重要であると考える。

道元禅師は引用によって十二分教を提示した後、「きく」こと、換言すれば可説による十二分教の展開を前提とした説示を行っている。[9]このことから、禅師は引用する『法華玄義』の構造と内容を的確に把握し、それを踏まえた上で説示を展開していると言える。そうであれば、禅師は文言を用いた仏法の展開というものを重要視していたと考えられる。だからこそ可説による十二分教の展開を論じる『法華玄義』の説を受容し、間接的に文字不要の自己観察と認識された「教外別伝…」の主張を弁駁していると推察する。

『法華経』を母体とした九分教の説示

「仏教」巻では九分教も提示されているが、その典拠は『法華経』である。記述は以下の通りである。

一者修多羅　二者伽陀　三者本事　四者本生　五者未曾有　六者因縁七者譬喩　八者祇夜　九者優婆提舎　『全集』一（三九〇頁）

紙幅の都合上、原文の掲載は省くが、管見の限りこれと一致する九分教は『法華経』にしか存在しない。[10]更に禅師は九分教について以下のように説いている。

この九部、おのおの九部を具足するがゆえに、八十一部なり。九部おのおの一部を具足するゆえに、九部なり。帰一部の功徳あらずば、九部なるべからず。帰一部の功徳あるがゆえに、一部帰一部なり。このゆえに八十一部なり、此部なり、我部なり、払子部なり、拄杖部なり、正法眼蔵部なり。　『全集』一（三九〇頁）

ここで重要なのが「帰一部」という禅師の見識である。この「帰」は「帰結」と捉えてよいかと思うが、先の九分教が『法華経』に依拠していることを考慮すれば、「一部」は九分教の全体、乃至は九分教の一分を指すと同時に仏法の「一」、即ち開三顕一・会三帰一と言われる『法華経』の一乗法の展

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

開に重ねていると考えられよう。そうならば、「帰一部」とは九分教の一分に九分教の全体が帰結することを示すと共に、八十一分教としての九分教が仏教という一部に帰結することを説いていると言える。この説示から、禅師は小乗法として認識されてきた従来の見解を踏襲せず、『法華経』を基盤としながら大乗教として九分教を位置付けている様子が窺える。そして、この説示の後に『法華経』の「我此九部法…」[11]という経文を引用し、各々の句に即して説示を展開するのであるが、「入二大乗一為レ本」という句について、

入大乗為本、といふは、証大乗といひ、行大乗といひ、説大乗といふ。しかあれば、衆生は天然として得道せり、といふにあらず、その一端なり。入は、本なり、本は頭正尾正なり。

『全集』一（三九一頁）

と説いている点は特に重要であると考える。即ち、経文では九分教を「大乗に入る本」と位置付けている文を発展させ、九分教そのものが大乗を証・行・聞・説するものであると教示しているのである。九分教の典拠が「方便品」であることを考慮すれば、この四種は四仏知見に重ねていることも考えられよう。そして、「入」を「本」と同義としていることから禅師は『法華経』における本迹の構造を前提とした上で本門の教理に重きを置いていると思われる。こうした解釈は先の十二分教の解釈にも通じるものであるが、それを九分教の解釈にも応用したのは禅師の創説であると考える。

まとめ

以上の点から、禅師は九分教と十二分教を同等の大乗教理と位置付けることによって「教外別伝…」の誤謬を批判すると共に、自己が証・行・聞・説すべき仏教として証明していると考える。換言すれば、従来、経典分類の体系として認識されていた九分教・十二分教という教法自体を仏法・仏教の当体として確立することによって全経典の重要性を説き、安易な文字不要論や単なる自己観察に陥っていた禅者の見識を鋭く排斥していると言えるのである。

1　『道元禅師全集』（以下『全集』）一（三八二頁）。　2　林鳴宇氏は「律宗新学名句の一考察」（『宗学研究』四八所収、二〇〇六年三月）で十二分教の典拠を『律宗新学名句』としている。　3　『全集』一（三八五頁）。　4　「摂決択分中声聞地之三」（『大正』三〇、六八〇頁下）。　5　巻第六上（『大正』三三、七五二頁上）。　6　巻第六上（『大正』三三、七五二頁下―七五三頁上）。　7　巻第一下（『大正』三三、六八八頁中）。　8　同注7。　9　『全集』一（三八九頁）。　10　「方便品」（『大正』九、七頁下）。　11　「方便品」（『大正』九、八頁上）。

〈キーワード〉　道元、『正法眼蔵』、仏教、『法華経』、『法華玄義』

（曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員）

NII-Electronic Library Service